

笑顔が増える社会を目指して

—幸福研究の実態と若者の意識調査をもとに—

1155101 高ヶ内芽衣 指導教員 藤掛洋子

【背景と目的】2013年夏、開発途上国であるパラグアイへ行った際に、パラグアイ人が貧困にもかかわらず、笑顔を絶やさずに満足そうで幸せそうな暮らしをしている光景を目の当たりにした。貧困なのに幸せなのか？なぜ皆笑っているのだ？彼らの姿を見て「幸福」について疑問を感じた。モノで溢れ、物質的には非常に豊かな日本であるが、心の豊かさという面ではパラグアイ人に劣っているように感じた。心の豊かさとはいったい何か。横浜の大学生が考える幸福とはどのようなものか。それは何に起因するのか。これらを調査し、幸福度が上がる要因をつかめば、日本人もパラグアイ人のように皆笑顔で毎日楽しそうに暮らすことが出来るのではないかと考え、本調査に至った。

本研究では、1)従来用いられてきた幸福感調査は真の幸福感を明らかにしているのかを検証する。2)パラグアイ人と本学学生の幸福度を分析し、日本人の幸福感に溢れた笑顔を増やす為の施策を提案する。

【方法】文献・資料・インターネットによる調査と、パラグアイS村の少年少女11人・パラグアイ国¹カテウラ地区の男性・本学学生12人に対して幸福に関するインタビュー実施(2014年9月)。

【結果及び考察】幸福の言葉の定義は、日本語と英語では完全に一致せず、日本人と外国人の幸福の考え方は異なっている。例としてブータン国で重要視されているGNHの考え方はチベット仏教の教えに深く根付いている。よって、幸福の価値観は生まれ育った環境や国の文化、宗教に大きく影響を受ける。そのため、幸福度調査の国際比較は困難である。

幸福研究には主観的幸福と客観的幸福がある。これまで幸福の指標とされてきたGDPやGNHは客観的幸福である。データを数値化して間接的に幸福度を測定するので、国際比較がしやすい。しかし、数値が高いからと言って実際に幸福とは限らない。そこで重要になってくるのが、主観的幸福である。これは、感情状態を含み、人生や生活の満足度を測定するものである。回答者の判断によるので、結果に回答者の性格や心理状態が大きく影響する。また、これまで心

理学の分野でも様々な尺度を用いて主観的幸福感が検討されてきた。しかし、どの研究も質問項目に対して自由記述はなく、選択肢によって答えを指数化している。これでは、選択肢以外の答えが選択できず、型にはまった答えしか出ない。また、なぜこのような回答をするのかという感情的な部分の配慮が欠如している。よって、これだけではなく実際にインタビューを行い調査することが求められる。

筆者がパラグアイ人に実施したインタビュー調査から、幸福の尺度は経験から作られるということが明らかになった。パラグアイの貧困地域に住む子供たちは、遊びと言えばサッカーやバレーボールであり、日常的に家の手伝いをする。また、ゴミを拾って楽器を作り、それを売り生計を立てている。生きることで精一杯の生活である。彼らの生活はこれ以上でもこれ以下でもない。この生活から彼らの幸福感が形成されるのである。ゆえに、今の生活が一番幸せで、これ以上望むものは何もないという答えが出る。

本学学生への調査では、回答者14人中5人が「過去の経験から幸せを感じる」という回答であり、過去の経験は少なからず幸福と結びついていると結論付けられる。また、身近な出来事に幸福を感じる人は主観的幸福度が高いことから、幸福に対する考え方が主観的幸福度に大きく影響していると判断できた。回答者の性格が主観的幸福感に表れている。このことから、より正確で比較可能な幸福度を測るためには回答者の性格まで分析しなければならないと考える。

【結論】1)真の幸福度を測定するためには、従来行われている指数調査の客観的幸福度だけでは足りず、主観的幸福度ともうひとつ幸福に対する個人の考え方の考慮も必要である。2)幸福の考え方は宗教や文化によって異なり、幸福の尺度は経験から作られる。よって、身近な幸せに気付くことが主観的幸福度を上げることに繋がるのではないかと考える。

¹ 毎日1500トンものゴミが捨てられる、パラグアイ最大のゴミ埋立地。